沖縄北部ダム湖サミットを開催

～ダムを活かした水源地域の活性化～

沖縄本島における水資源開発の歴史

沖縄本島においては、戦後の都市用水使用量の増大に対し安定的に供給できる水源が少なく、構造的な水不足が慢性化していたため、本土復帰以降、安定した水資源の確保は最重要課題のひとつでした。

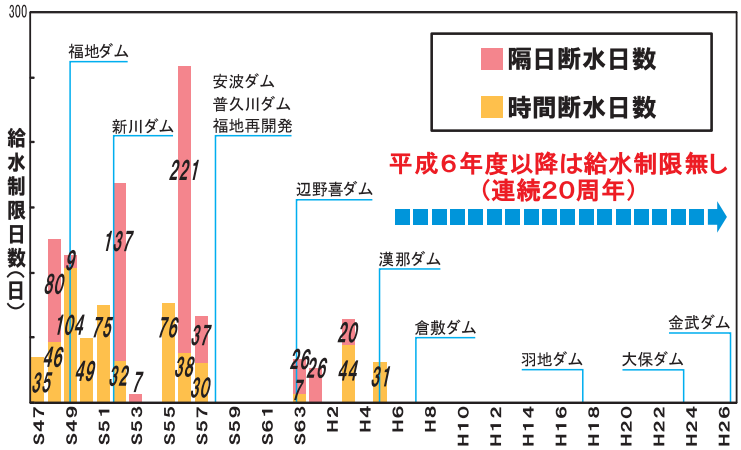
このため琉球列島米国民政府によって施工途上にあった福地ダムの建設承継を皮切りに、平成25年度までに本島北部を中心に計10のダムを建設してきました。

昭和47年の本土復帰以降もしばらくは毎年のように給水制限が繰り返され、特に記録的な大渇水となった昭和56年から57年にかけては延べ326日間に及ぶ給水制限が実施され、沖縄県民の生活や産業に深刻な影響を及ぼしました。

※倉敷ダムは瑞慶山ダムとして国が建設後、沖縄県が管理しています。

しかし都市用水の日平均取水量（県企業局水源取水量）は本土復帰当時の約22・0万㎥から約43・4万㎥（平成23年度）へと約2倍になるなど水需要が増大してきた中で、福地ダム完成以降も北部5ダムをはじめ、急ピッチでダムを建設し安定的な水源を確保することにより、平成6年3月以降は給水制限に及ぶような水事情の悪化は回避されています。（平成26年3月で連続給水20周年）

これまでの水資源開発により慢性的な水不足が大きく改善されてきたことから、沖縄本島におけるダムによる水資源開発は、平成25年度末の億首ダム（地元要望を踏まえ金武ダムに改名）の完成により、当面の節目を迎えました。



ダムの整備と給水制限実績の推移

ダムを活かした水源地域の活性化に向けて

この節目を機に、今後とも既存ダムによる安定的な水源を持続的に確保するとともに、ダムを地域資源として活用していく水源地域ビジョン（※）の実現を目的として、2月22日（土）に参加者約260名のもと、沖縄北部ダム湖サミットを開催しました。

基調講演では、元東村役場職員の山城定雄氏により「足元の地域資源を活かした地域活性化～蛇口の向こうの水源地域の戦略～」と題して、福地ダム等の地域資源を活用した地域活性化の取組について紹介頂きました。

続いて北部ダム事務所長より、福地ダムから金武ダムまでの建設記録を映像で紹介し、北部ダム統合管理事務所長より、国管理の各ダムにおける水源地域ビジョンの取組についての活動を報告しました。

その後のパネルディスカッションでは、水源地域の市町村長、消費地（中・南部地域）、観光関連、NPOの代表10名のパネリストから、ダム活用のあり方や他の観光資源との連携についてなど様々な意見が交わされました。

パネルディスカッションの最後にはダム所在地域（北部）間の連携のみならず、中南部地域との交流・連携を促進し、水源地〝やんばる〟の自然やダム湖の魅力を活かした活動を通じて、森や水の大切さを広く認識してもらえるように努力していくことが宣言されました。

今後とも、既存ダムによる安定的な水源を持続的に確保すると共に、水源地域ビジョンの実現により、ダムを地域資源として活用していくこととしています。

※ダム（水）を地域の資源と捉え、水源地域の自立的・持続的な活性化を図るために、ダム水源地の自治体・住民や関係行政機関で策定する行動計画

沖縄北部ダム湖サミット宣言

私たちは、沖縄北部ダム湖サミットにおいて、やんばるの自然と水の大切さを念頭に、以下のとおり理念や方針を共有し、具体的な行動の第一歩とする。

- やんばるの貴重な自然は沖縄の宝であり、本島における貴重な水資源でもあることから、県民全体で森を守り、水を守ることが重要。
- 水源地やんばるの自然やダム湖の魅力を活かした活動を通じて、森や水の大切さを広く認識してもらえるように努力。
- ダムの存在する北部地域の連携のみならず、中南部地域との交流・連携を促進。

平成26年2月22日
沖縄北部ダム湖サミット参加者一同